

# ニワトリの獣医師と呼ばれたくて 23

## ～一命懸命から一生懸命へ～

白田 一敏

### 数字のトリック

最近、『ビジネストリックの秘密』（今村研司著・雄鶏社）という本を読んだ。この本は、さまざまなビジネスの中にある、消費者心理を操るトリックについて実例を挙げて紹介しているものであった。

その中でも紹介されていたが、『スーツ二着買えば、一着はタダ』といった類の宣伝文句を紳士服の大手チエーンが頻繁に使用していることを筆者も聞いたことがある。実際に筆者自身もかつてスーツを一着購入したところ、一〇〇〇円でもう一着買えるという話につられて、一度に二着のスーツを購入したことを思い出した。その顛末はこの本の予測通り、二着のうち一着は使用頻度が極めて低い結果となった。すなわち、特に必要のないスーツまで買ってしまったというわけだ。つまり、筆者は紳士服店の狙いに完全に引つかかってしまったようだ。

さて、わが採卵養鶏業界でも、このような数字のトリックはさまざまな場面で遭遇する。例えば、『SE (Salmonella Enteritidis) は、鶏卵一

万個当たり数個の頻度で汚染されている」と一般的に言われている」といった類のものだ。これらの説の根拠となったデータは、米国のペンシルバニア州で一九九二年から行われたサルモネラ調査（パイロットプロジェクト）や、カリフォルニア州でSE汚染が発覚した養鶏場における調査（一九九五年）に由来すると思われる。前者におけるSE汚染出現率は、鶏卵一万个当たり二・七五個。後者は二・八個であったとされている。

これらの調査結果に対して異論を唱えるつもりはない。しかし、鶏卵のSE汚染に関するファイルドデータが極端に少ないという事情からか（？）SEを含むサルモネラに関して説明される際に、これらのデータが普遍的な結果として扱われることが多い。続いて、そのまま消費者に紹介され、イメージが定着してしまふと業界にとつて好ましい結果とならないことは明白だ。

問題にしたいのは、先に紹介した米国の事例はSE汚染農場にお

けるデータであり、この部分がトリックとなつてゐるわけだ。SE汚染のない養鶏場にこの汚染率が必ずしも当てはまらないことは、少し冷静になつて考えれば理解できよう。一番大切な情報が抜けたまま消費者に伝わると、誤解を招く恐れがあることは言うまでもない。

PPQCでは年間四〇〇五〇万个以上の鶏卵を調べているが、清浄な養鶏場の鶏卵にはSEは含まれていない。極まれなケースの話だが、SE汚染が酷い養鶏場の事例では、鶏卵の汚染率が二〜三%に上るケースすらある。我々の調査からもわかるように、米国の調査結果は決して普遍的なものでなく、発生事例の一つと理解するのが正しい解釈と言えよう。

しかし、実際の社会では「鶏卵のSE汚染一万个に数個」という数字のみが一人歩きしてしまつた場面に遭遇することが少なくない。その代表例は、医師が食中毒症状の患者を診察する際に時折認められるようだ。患者からSEが分離されようものなら、タマゴを食べていないか真つ先に聞けらう。まさに、「鶏卵一万个に数個のSE汚染」や「SE

「鶏卵が原因」という先入観が固定化されたと言わざるを得ない。

一九九七年に国立感染症研究所が調べた調査では、SE食中毒の原因食メニユーにおけるタマゴ関連食品の比率は五七％。家庭でのSE食中毒の発生は九％。SE食中毒の原因は、集団給食施設等の調理場における二次感染が主因と結論しているに

## サルモネラ検査の採材

「採血セットにサルモネラ検査用のガーゼを加えてみよう」

いつものデイスカッションの中で浮かんだアイディアをドクターKは口にした。採血セットとは、現場で作業しやすいように注射器に番号を事前に記入し、所定の本数ずつを小梱包したセットのことで、臨床症状を記載できるメモや筆記用具、解剖用のメス、小ハサミ、ならびに消毒剤をひとまとめにしたものである。

それまで農場巡回と言えば、採血を中心とした作業のことであつたが、この日を境にサルモネラ検査用の拭き取り作業も加わつた。

「採血する時に、一緒に環境拭き取りサンプルを取れば効率良いだろ

も関わらず、医師の先入観が固定したケースが多いことは、極めて残念である。

「疫学分野で獣医学が医学をリードしたい」

そういった意気込みをモットーに疫学情報を得るために、PPQCでは採卵養鶏場におけるサルモネラ調査をいろいろな角度から試み始めた。

う」とドクターK。

「採血の他に拭き取りの採材ですか？ 巡回の時間が倍になりますね」と気の進まない筆者。

「実際にやってみなければわからないだろう」

「対象サンプルは鶏舎内の塵埃ですか？」

「そうだな。鶏ふんのサンプルも欲しいな」

「鶏ふんのサンプルはどのような採材するのでしょうか？」やばい展開になってきたと内心思う筆者。

「高床式の鶏舎の下にたくさん溜まっているだろう」

「えっ。鶏ふんの中を端から端まで歩くのですか？」鶏ふんに埋もれ

る心配をする筆者。

「とにかく、現場で試してみよう」ドクターKは前向きな姿勢を崩さない。

後日、現場にて。

ドクターKは、どこかのホームセンターで調達した番線を取り出し、その先にスキムミルクで湿らせた滅菌ガーゼを取り付けた。番線の先端にあるガーゼを鶏舎の床面に置き、鶏舎通路の端から端まで引きずった。鶏舎環境拭き取りサンプルのうち、床面からの採材は意外と簡単に終わった。ただし、一〇〇メートル近い鶏舎内を何往復もするのだから時間はそれなりに必要であつた。

次に、いよいよ鶏ふんサンプルの採材だ。高床式鶏舎のケージ下部分の鶏ふん置き場入口にあるドアを恐る恐る開けると、予想通り鶏ふ

んの山がいくつもあつた。それだけではない。クモの巣や鶏の死骸、ネズミのふんなども落ちていた。

「やはり酷いな。無理もないか……」  
予想通りの惨状に溜め息交じりの筆者であつた。

高床式鶏舎には開放式とウインドレス式の両方のスタイルがあるが、清掃時に割れたタマゴの粕や埃などは床下の鶏ふん置き場に捨てることが一般的である。したがって、鶏ふんのみならず、さまざまな汚れ物が山積するのは仕方ない話だ。

「まず私が採材してみるから、ここで待っていて」。この惨状を見ても彼はまったく動じない。

本当にこの山積した鶏ふんの中を鶏舎の反対側まで行くのだろうか？と疑念を抱きつつ、彼を見守つた。

ドクターKは鶏ふんの山裾部分を確かめながら、先のガーゼを新鮮な鶏ふんが落ちている山頂付近に当て、ゆっくり歩き始めた。しばらく見つめていると次第に彼の姿が見え難くなった。数分間経過したところで、再度彼の姿がこちらに近づいてくる様子を確認できた。

「大丈夫そうだ。鶏舎の端を歩けば、充分採材できる」

自らの行動で確かめた以上の説得性はない。

「次の鶏舎は君が採材してみて」

「ハイ……」。見本を見せられて嫌とは言えない。

次の鶏舎にて。

「とうとう自分の番か……」。内心複雑な気持ちだつた。しかし、嫌と言える雰囲気ではない。仕方がなく、思い切つて鶏ふんの山裾へ足を踏み入れた。

「うあ。足が潜つた」

「鶏ふんが頭に落ちてきた」

実際に自分自身で行つてみても、嬉しい作業ではない。我慢という言葉が脳全体を占めた。

「なんで獣医師になつてまで、鶏ふんの中に入るような仕事をしなればならないのだろうか？」という気持ちが増え、少々悲しくなつてきた。これまで自分なりに積み重ねたプライドらしき気持ちもグズグズタになつた。

同時に、「どうして地位も立場もある偉い先生がこのような汚れ仕事を平然とやつてのけるのであろうか？」といった疑問も沸いた。

「いろいろな意味で必要だと思つからさ」

これがドクターKの答えだつた。今から振り返ると、含蓄のある回答であつたと思える。

「いろいろな意味」について、筆者なりの解釈を一つを挙げれば、それは『真実の追究』と言える。例えば、鶏ふんを調べることが鶏群のサルモネラ（SE）汚染を忠実に反映するのであれば、調査すべき項目に加えることが本場に役立つデータと言えるわけだ。採材過程の大変さは関係ない。困難は工夫して乗り越えればよいという発想である。

現在は鶏舎構造の変更なども含めさまざまな点が改善されたので、当時の採材方式から変化してきているが、発想を変えて取り掛かれば道は開けることがこの経験を通じて理解できた。また、もっと大切なことも学んだ。すなわち、自らの足で苦労して集めたデータは、自信を持って見解を主張できるということだ。やはり、相手を説得する際に

自分で集めたデータの説得性の強さは、他人のデータとは比べものにならない。

昨今、時代の動きが著しく早まっている。加えて社会からの要望も多岐にわたる。それらに伴って科学技術に対する要求も厳しいものに変化してきている。この流れに対応し、デジタル的思考の科学技術や遺伝子解析技術など結果を得るのがスピーディーな技術が中心になりつつある。データを得るまでの時間が長い研究を待つ社会的な余裕は少なくなつてしまつたのではないかと心配する。地に足をつけた研究が評価されないとなれば、研究背景も考えることなく効率よく他人の研究に上塗りするのが落ちである。そうならば、数字のトリックも見破れない。

このような時代の流れに対し、少なくとも筆者は、『木を見て、森を見ず』ということにならないようにしたいものである。

## 本当の敵は……

### 『健康』

一定水準以上の生活（物質的な豊かさ）が確保されている国では、

人々の会話の中であいさつと本題をつなぐ話として、『健康』に関する話題は『天候』のそれと双壁であると

言えよう。まして、昨今の日本では犬や猫まで糖尿病を患う時代なのだから、広義に捉えれば、『健康』に関する話題は多岐にわたる。

テレビ番組では『健康』に関する話題を取り上げると、視聴率が稼げることもあつてか(?) 普遍的と言つてよい学説から研究途中の学説まで引つ張り出して、ある意味で消費者を洗脳している。放送時間が限られているから、研究の背景まで紹介することは少なく、多くの視聴者は数字のトリックに気がつかないことが多い。

ニワトリの獣医師として養鶏場を頻繁に訪れる筆者は、経営者や現場責任者の方々と面談する機会が多いのだが、その際、『健康』に関する話題は非常に重宝するものだ。特に、

背負わなければならぬ社会的責任が桁違いに大きい経営者は、自らの健康管理や維持も重要な仕事だから、彼らの知識量は半端でない。

仕事柄、タマゴとの関わりが深いコレステロールについては、養鶏家の関心が高い。このコレステロールの値は、高い状態で続くと動脈硬化を引き起こし、心臓病や脳卒中という危険な成人病になる危険性が高いとされている。このような学説の一つがテレビ番組などによりクロロースアップされた結果、タマゴや関連する商材の消費が落ち込むといった世相があつた。

一方、『日本人よ コレステロールを恐れるな』(長谷川元治著、主婦の友社)に記載されているように、動脈硬化の成因、診断基準、ならび

に治療の目安を考える際に、コレステロールが主役でない(他の要因もある)という見方がある。

どちらの学説が真実なのか否かについては、医学技術のさらなる発展を待たねばならない部分もあり、その真偽については筆者が判定する立場にないが、『タマゴの摂取過多』コレステロール値の増加、動脈硬化・心臓病・脳卒中』という図式に、消費者が洗脳され、その度にタマゴの消費が影響することは業界にとつて迷惑な話だ。

そういった意味で業界の本当の敵は消費者マインドと言える。しかし、いつまでも被害者になりきつていても進歩がない。他業界のように業界主導で積極的に情報開示する必要性を感じる。コレステロールの間

題は、業界の努力やマスコミの取り扱いの変化などにより沈静化してきたように感じる。しかし、最大の懸案事項である高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)の問題については課題が山積しているように感じる。

HPAIが再発した場合のマスコミ対応はどうするのか? 不幸にも備蓄されたAI不活化ワクチンを使用しなければならぬ状況になった時、消費者マインドまで考慮しているのだろうか? 業界主導で、事前には是非ケーススタディしていただきたいテーマである。業界を愛する筆

筆者: (株)ピーキーシー

品質管理 & 生産管理部門長  
獣医学博士 / 獣医師